

「一隅を照らす」～アフガニスタンを救った中村哲医師～

日本から西へ約 6000km 進んだところに、アフガニスタンという国があります。これまで他国の侵攻や攻撃をたびたび受け、国内でも武力紛争が続いています。また、雨が少なく、作物が育ちません。深刻な水不足と食糧不足に多くの国民が苦しみ、そして命を落としています。この現状を何とかしようとした人が、中村哲医師です。

中村医師は九州の病院に勤めていましたが、1984年アフガニスタンの隣国パキスタンのペシャワールへ派遣されました。主にハンセン病患者への治療活動を行っていました。当時、ペシャワールの病院を訪れる患者半数は、アフガニスタンの戦乱から逃れてきた難民でした。中村医師は国境を越えてアフガニスタン側にも診療所を開設、両国で11か所の診療所を運営していました。



2000年にアフガニスタンで大干ばつが発生します。農地の砂漠化が進み、飢えと渇きのため子どもたちを中心に多くの犠牲者が出ました。診療の順番を待つ列に並んでいる間に、子どもが亡くなってしまいうことも珍しくなかったそうです。これをきっかけに中村医師は医療活動以外のある行動を始めます。それは何だったのでしょうか。

「100の診療所より、1本の用水路」

「病気の背景には食糧不足と栄養失調がある。」そう考えた中村医師は、井戸掘りを始めます。掘った井戸は1600か所にのぼりましたが、地下水に頼る井戸は不安定で水の量にも限界があります。そこで、中村医師は2003年から大きな川から水を引く農業用水路の建設に着手します。ただ、中村医師は土木に関しては素人で、現地に用水路を造れる技術者は1人もいません。中村医師は、必要な知識を得るために自分で勉強しました。自分でショベルカーを運転して工事の先頭に立ちました。その中で、日本の江戸時代からの工法を研究し、特別の技術や材料を必要としない、アフガニスタンの人だけで維持・管理ができる、アフガニスタンにとって最適の技術を取り入れていったのです。

そんな中、同時多発テロの犯人をかくまったという理由で、アフガニスタンへの空爆が始まりました。武力紛争も激しくなり、一緒に活動していた日本人が命を落としたり、中村医師自身も流れ弾によってけがをしたりする（自分で治療したそうです）など、危険な状況になります。それでも中村医師は活動を続けました。

一隅を照らす（今いる場所で希望の灯をともし）

中村医師が好んで使った言葉です。「泣いている子どもがいたら、『どうしたの？』って声を掛けるじゃないですか。それと同じです。」と中村医師は言います。困っている人がいたら助けるのは当たり前ということです。

現地の人と共に汗をながし、これまでに完成させた用水路は27km。16,500ha（上島町の約5.5倍）が緑色の田畑に変わり、65万人の命を救ったと言われます。

残念ながら中村医師は、2019年12月4日、工事に向かう途中襲撃され、命を落とします。しかし、中村医師の功績は世界中から賞賛され、その遺志は多くの人に受け継がれています。



